

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03040

研究課題名(和文) 現代インドの村落・都市中間地帯における親密圏の再編 移動社会を支えるケア関係

研究課題名(英文) Reassembling intimate spheres in rural areas of contemporary India:
Relationships of care in societies on the move

研究代表者

常田 夕美子 (Tokita, Yumiko)

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・外来研究員

研究者番号：30452444

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代インドの村落・都市中間地帯(ラーバン)における親密圏の再編の様相を明らかにした。ラーバンでは、村落のように伝統的な規範にとらわれず、また都市のように核家族を基本単位とせず、家族・親族関係や知人・友人関係また近隣関係を用いた、老人や寡婦そして乳幼児のための柔軟なケア関係が生み出されている。ラーバンにおける新たなケア関係は、人・モノ・カネ・情報が農村と都市の間を環流する移動社会を支える生活基盤として重要である。本研究では、特に女性の行為主体性に着目し、ラーバンの人びとが、モビリティの幅を広げつつ、必要なケア関係を確保するために、親密圏を創造的に再編する過程を描写・分析した。

研究成果の概要(英文)：This research examined the emergent meanings of being kin in so-called "rurban" areas in coastal Odisha, India. By rurban, I refer to the newly developing residential areas spatially located in between rural and urban zones, where norms, values, and practices of the village and the city meet to create hybrid meanings of personhood, marriage, family, and ageing in contemporary India. I explored the creative ways in which rurban people build new relationships of care that adhere to neither traditional family norms nor patterns of a modern nuclear family. Through extensive fieldwork, I investigated how migration into rurban areas empowers women and the socially vulnerable to negotiate and resist marginalization, and opens up spaces for new affective relationships that are not dictated by obligations of blood and affinal ties.

研究分野：文化人類学

キーワード：インド 親密圏 ケア 家族 親族 女性 ラーバン

1. 研究開始当初の背景

現代インドにおいては、経済発展が進み、人びとの移動が増えるなかで、村落と都市の間を媒介する村落・都市中間地帯 (rurban、以下ラーバン) が拡大しつつある。これは、村落と都市が溶融し [水島他編 2015]、人・モノ・カネ・情報が両者の間を環流的に移動する現象と関連している。

近年の多くの研究は、空間的な溶融と移動が、現代インドの経済発展の動態を支え、脱境界的な新たな社会文化の構築を可能にしていることに着目する [Deshingkar and Farrington 2009]。報告者自身もこれまでの研究において、現代インドの親族・知人ネットワークが、村落、都市、海外という多様な場所をリンクし、人やモノの環流的移動という社会経済的動態の基盤となっていることを明らかにし、そのなかでラーバンが村落と都市をつなげる媒介的な場として移動社会を支える役割を果たしていることを論じてきた [常田 2015]。

ただしフィールドワークを進めるなかで明らかになってきたもう一つの側面がある。それは、ラーバンが村落から都市への就学・就職のステップアップやその後の社会経済的上昇のために重要な機能を果たしている一方、動きにくい人びと 老人、寡婦、乳幼児などの社会的弱者 のケアを誰がするのかという課題を抱えていることである。従来の研究は、現代インドの社会経済的動態を説明するために移動する人びとに主に注目しており、動きにくい人びとのケアという問題については十分な着目をしてこなかった。

報告者の準備的調査で、社会的弱者のケアについてもラーバンが重要な意味を持っていることがわかってきた。現在、村落でも都市でも十分なケア関係はつくりにくい。村落では、父系リネージ・夫方居住婚の原理に基づき、嫁が主に老人や乳幼児の世話をするが、世帯の移動・移住が進むなかで人手不足になりがちであり、また特に近年市街地で充実しつつある医療施設へのアクセスが十分でない。寡婦は実家の村に戻され、一生肩身の狭い生活を強いられるか、悪条件のもとに再婚させられるか、どちらかである。都市では、核家族で共働きが多いため、日中老人や乳幼児の世話をする人手が足りない。また寡婦は一人暮らしになることが多い。

一方ラーバンでは、キンドレッド的な家族・親族関係を柔軟に利用し、居住地を戦略的に選択できる。また人間関係が比較的密であるために、知人・友人関係また近隣関係を基盤とした相互扶助関係の構築も可能である。さらに市街地に通勤・通学することが可能であると同時に、必要時には医療施設などへのアクセスも容易である。

こうしたことから、老人、寡婦、乳幼児を抱えながら都市部で職をもつ人びとが居住地としてラーバンを選択し、そこにおいて、従来の家族・親族形態を超えたケア関係とい

う新たな親密圏を構築していることがわかってきた。

ラーバンは村落と都市の間の環流的移動の基礎となる親族・知人ネットワークのハブとしての機能を果たすと同時に、社会的弱者のケアのための新たな親密圏の場を担うという重要な機能がある。このなかで女性は、親族・知人ネットワークと新たな親密圏の構築において、つまりモビリティとケアの双方を支える社会的基盤を創るにあたって中心的な役割を担っている。

現代インドの社会経済的動態を理解するためには、人のダイナミックな移動を支えるネットワークを把握すると同時に、動けない人びとへのケアの基盤がいかに創られているかを検討する必要があると考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

現代インドのラーバンでは、村落的な共同性・関係性・定住性と、都市的な個人性・自律性・移動性という異質な要素が混交した新しい生活文化が形成されつつある。そこではまた、カースト、宗教、階層の異なる社会集団が混住し、従来の境界を超えた新たな社会関係がつくられている。

ラーバンでは、人生機会を広げるためのモビリティを確保しながら、同時に社会的弱者をケアするために、従来の家族・親族関係やカースト関係を超えて、衣食住などの生活に密着した助け合いを行う新たな親密圏が創造されている。そこでは、女性が主要な行為主体になると同時に、モビリティを得て、公共圏で新たな社会経済機会を獲得しつつある。

ラーバンにおけるケアとモビリティのつながりは、親密圏と公共圏の接合するところであり、そこにおいて新たに生じている関係性や共同性は、従来の親密圏と公共圏の領域分担を再編するものとなっている。その様相を解明するために、以下の三点について、それぞれ問いを立て明らかにすることを目的とした。

(1) 新たな親密圏によるケア関係のつくり方：ラーバンにおいて、老人、寡婦、乳幼児の世話をしているのは誰か。その新たな親密圏はどのような社会関係と居住戦略によって構築されているのか。その社会空間はカースト・宗教・階層の境界をどの程度超えているのか、あるいはどのような排他性を有しているのか。そうした新たな親密圏はどのような社会文化的価値によって支えられているのか。

(2) ケア関係とモビリティの関連：老人、寡婦、乳幼児の生活基盤の確保と、就労・就学者のモビリティとが、相互的に支え合う仕組みは、いかにつくりられているのか。その仕組みのなかで、ケアは下層民による新たな労働機会

に過ぎず、モビリティにより人生機会を拡大する中間層と、限られた就業機会しかない下層民の階層関係を再生産するだけのものなのか、それともさまざまな階層やカーストにおいて、ケアとモビリティを両立する仕組みができてくるのか。

(3) 女性を主体とする親密圏と公共圏の再編の様相：新たな親密圏の構築において女性はいかに主体的に行動しているのか。ジェンダー的役割分担構造はどの程度変化しているのか。女性自身もモビリティを得て公共圏で新たな社会経済機会を獲得しているのか。親密圏における家族・親族の形態変化と、公共圏における就学・就業構造の変化はいかに相互に関連しているのか。

3. 研究の方法

本研究は、日本での文献研究および現地でのフィールドワークをつうじて行った。現地調査では、個人インタビュー、住民同士のグループディスカッション、参与観察の方法を用いて、研究目的に沿って、(1)新たな親密圏によるケア関係のつくられ方、(2)ケア関係とモビリティの関連、(3)女性を主体とする親密圏と公共圏の再編の様相について調べた。

現地調査は、すでにラポールを築いているオディシャ州のラーバン地域モトリ、モンダラバスタ(クルダー町、ブバネシュワル市の通勤圏)で行うと同時に、そこから広がる親族・知人ネットワークを追いかけるかたちで、その先にある諸都市(ブバネシュワル市、プリー市)や諸村落(ゴロマニトリ村、ボダバサンタ村)を対象とした。

4. 研究成果

(1) ラーバンにおける新たな親密圏によるケア関係のつくられ方

ラーバンにおけるケア関係がいかにつくられているかを明らかにするために、親族関係、近隣関係、異なるカースト間との関係、新規移住者と旧来居住者との関係について調べた。また、誰が誰とものやりとりをし、誰が誰の料理、掃除、身の回りの世話をしており、それらにカーストがどのように影響しているかを考察した。さらに、ケアに関する人びとの関係性についての新たな語り方について調査をした。

その結果明らかになったのは、ラーバンにおいては、既存の親族構造を超えて、人びとの間の物質=価値の共有の積み重ねによる身体・人格的なつながりの構築 [常田 2010]が、ケア関係と結びつき、新たな親密圏を形成していることである。ケア関係は、衣食住という人間の生命の有機的過程に関わるものであり、従来のインド社会では細かなカースト的規制があった [Parry 1979]。ラーバンにおける親密圏の再編は、こうした社会規制や文化価値を揺り動かす可能性があるのでは

目される。

(2) ケア関係とモビリティの関連

ケア関係がいかにモビリティを可能にしているかを明らかにするために、誰が一日に何時間、老親の介護、乳幼児の世話、寡婦となった姉妹・義理の姉妹のケアをしているかについて調査をした。また、誰がどこになぜ移住しているか、誰がどこに通勤・通学しているかについて調べた。

その結果明らかになったのは、ラーバンにおいては、老人、寡婦、乳幼児の生活基盤を確保することと [Seymour 1999]、就労・就学者のモビリティとが、相互的に支え合う仕組みが新たにつくられていることである。さらに、ラーバンが支えるケア関係とモビリティは、ある程度、既存のカーストや階層と関わっているが、同時に、従来のカースト間関係、階層間関係に変容をもたらしていることがみられた。

(3) 女性を主体とする親密圏と公共圏の再編の様相

親密圏と公共圏の再編の様相と、そこにおける女性達の役割や戦略を明らかにするために、住民たちがラーバンを居住地にした理由について聞き取りを行った。また、ラーバン女性の結婚後・出産後の就学・就職率および就学・就職先について調べた。さらに、女性が主体として行う親族・知人・近隣民との贈与・分配関係や、携帯電話や相互訪問などによるおしゃべりによって成り立っている関係性について調査した。

その結果明らかになったのは、ラーバンにおける新たな親密圏とそこから広がる親族・知人ネットワークが、現代インドにおける女性のモビリティや公共圏での役割を実践的に支え、新たな価値観 [Radhakrishnan 2009]を醸成し、また親密圏と公共圏の境界領域の再編につながっていることである。

本研究で得られた成果の国内外における位置づけとして重要なのは、現代インドの社会動態に関する分析視座の転換である。従来の研究は主に人、モノ、カネ、情報の活発なモビリティに着目してきた [Gidwani and Sivaramakrishnan 2003; 柳澤 2014]。この観点が重要であることはいうまでもないが、台頭する移動社会の陰で、動けない社会的弱者をいかにケアするかという新しい社会的課題が生じていることは看過されてきた。

本研究は、ラーバンにおいて、家族・親族関係や知人・友人関係また近隣関係を柔軟に利用した、老人や寡婦そして乳幼児のための新たなケア関係の構築に着目する点が独創的である。ラーバンは新しい親密圏の構築によって、社会的弱者のケアを支えると同時に親族・知人ネットワークを再構成し、村落と都市の間の環流的な移動社会を支えている。

本研究は、今日の社会経済動態を支えるラ

ーバンにおいて、モビリティとケアの双方を可能にするような社会的メカニズムがいかに構築されているかを解明することとなった。それは、現代インドのカースト・階層・ジェンダーの動態について、新たな視点からの分析を可能にするものでもある。また従来の現代社会論がしばしば都市化や個人化を強調するのに対して、今日の社会動態を支える場所としてのラーバンに着目し、親密圏や親族・知人ネットワークの重要性に注目することによって独自の研究成果が得られた。

研究の主な成果について具体例をあげると、ケアに関する人びとの関係性について様々な新たな語りを発見したことである。例えば、村落出身で現在ラーバンあるいは都市部に住んでいる40代の女性たちが、自分たちの幼少時代と比べて親子関係が極めて希薄になっているとしきりに語る。その理由として彼女たちがあげるのは、ラーバンや都市部における中間層女性の高学歴化や社会進出である。高学歴で仕事をもつ女性は、子供や親のケアをしないというのが、低学歴で無職の村落出身の女性たちの批判である。

それらの語り方だけでは、「近代化による個人主義の台頭」という従来のステレオタイプ化との差異はみられないが、新たな現象として注目されるのは、それらの語りにつ随する理由づけである。それは、近年増加しつつある病院での出産、特に帝王切開が、母子関係を弱めているという村落出身の女性の語りである。

村落出身の女性たちは、従来は夫の家あるいは実家で、母子がともに出産の痛みを体験し、その苦しみを共有することによって親子の絆が確かなものとして築かれたという。それに対し、病院での出産が増え、医者が介入するようになると、母子共々にとって出産の痛みが軽減されるため、苦難を通じての連帯感が弱まり、親子関係も希薄になるというのである。女性たちは、交通の便がよく、医者や病院へのアクセスが容易なラーバンや都市部に住むことの負の側面として、親子の間のケア関係の変化、希薄化を主張するのである。

以上のように、ラーバンや都市の利便性、女性の高学歴化、社会進出について、村落出身者から批判的な語りが見られる一方、男子のみならず女子にも、よりよい進学や就職の機会を与えることを目的とし、家族が村落からラーバンへ移住するケースが増加していることも注目される。

さらに興味深いのは、近年においては、男子に高い教育を受けさせても、息子は親を裏切り、仕送りをしたり、老後の面倒をみたりすることを拒否するのが多いため、娘に教育投資をする方が、親にとっては有利であるという新たな語りや認識である。

例えば、看護師などの資格取得のために女子の教育に投資する家族・親族の新たな戦略

が見られる。看護師として職を得れば、女性は、嫁ぐ前には親や兄弟姉妹にとっての稼ぎ手になる。また、働く女性は、無職の女性より高所得の男性と結婚する可能性が高い。

教育を受けた女性は、結婚前も後も、経済的側面からも情動的側面からも、自らの家族・親族のケアの担い手として期待される。それは、従来の父系親族集団、夫方居住婚の規範を揺るがす要因になっているといえよう。

研究開始当初予期していなかったことは、現地調査を予定していたラーバン地域のうちの一つに通うには、リスク管理、安全確保のために、運転手付きの車をレンタルする必要が生じたことである。そのため、その地域での調査は数回で中止したが、そういった事態が起きたことによって、ラーバン地域の男性たちのモビリティおよび彼らと家族のケア関係について新たな知見を得ることができた。

様々なカーストの下層で低学歴の独身男性たちは、積極的に車の運転のスキルを身につけ、数年間タクシー会社で勤務したのち、個人でタクシー・サービスを運営し、プリー市、プバネーシュワル市、オディシャ州外のコルカタ市、チェンナイ市など広範囲にわたる地域に活動範囲を広げ、現金収入を得て、モビリティを獲得している。彼らが得る現金収入は、ラーバンに住む家族の生活費のみならず、医療費、学費、持参金に使われる。それらの独身男性の現金収入は、年老いた両親の医療費、未婚の姉妹たち、同居する兄の子供たちの医療費、養育費など、現金が必要なケアのために重要であることがわかった。

本研究の具体的なインパクトとしては、国外で人類学以外の分野からも注目されたことである。2015年5月にシンガポールで開催されたThird Congress of the Asian Association of World Historians (AAWH)で研究成果の一部を発表した。そこでは、現代インドにおけるラーバンへの移動や定住に関する分析を提示することによって、インドおよび中国の近現代史の専門家たちから高い評価を得た。

さらに、人類学の分野でも、本研究は新しいタイプの家族・親族研究として注目された。2018年2月にインドで開催された国際学会Examining the 'New' in Kinship and Family in South Asiaで研究成果の一部を公表した。その内容は、インド人の主催者および日本人の参加者に評価され、2018年9月に金沢で行われる日本南アジア学会第31回全国大会でのテーマ別セッションの発表として応募することになった。

今後の展望としては、本研究で得られた成果をもとに、現代インドにおいて変貌する家族・親族の新たな諸側面について、引き続き明らかにしたい。さらに、近年のネットワー

ク論や空間・場所論また親密圏・公共圏論の新たな発展をとりこむことにより、現代インドの社会動態とそれを支えるメカニズムについて、人類学の立場から新たな知見をもたらすことを目指す。

<引用文献>

常田夕美子、「第2章 空間の再編と社会関係の変容 農村、都市、海外をつなぐ親密ネットワーク」三尾稔・杉本良男編『現代インド6 環流する文化と宗教』、東京大学出版会、2015、51-72。

常田夕美子、「ヒトと身体」田中雅一・田辺明生編『南アジア社会を学ぶ人のために』、世界思想社、2010、12-23。

水島司、柳澤悠編『現代インド2 溶融する都市・農村』、東京大学出版会、2015。

柳澤悠『現代インド経済 発展の淵源・軌跡・展望』、名古屋大学出版会、2014。

Deshingkar, P., and J. Farrington. 2009. *Circular Migration and Multilocational Livelihood Strategies in Rural India*. New Delhi: Oxford University Press.

Gidwani, V., and K. Sivaramakrishnan. 2003. "Circular Migration and Rural Cosmopolitanism in India", *Contributions to Indian Sociology* 37 (1-2): 339-367.

Parry, J. 1979. *Caste and Kinship in Kangra*. London: Routledge & Kegan Paul.

Radhakrishnan, S. 2009. "Professional Women, Good Families: Respectable Femininity and the Cultural Politics of a 'New' India", *Qualitative Sociology* 32: 195-212.

Seymour, S. 1999. *Women, Family, and Child Care in India: A World in Transition*. Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計4件)

Tokita-Tanabe, Yumiko. " 'Affection is something heavenly' : Lived relations of kinship and family in rurban areas of Odisha, India." Examining the 'New' in Kinship and Family in South Asia. 1-2 February 2018.

常田夕美子「個から広がる関係性：インド・オディシャーにおける初潮儀礼の事例から」現代インド地域研究 MINDAS 研究会「個と集団のつながりの動態」2016年7月30日。

Tokita-Tanabe, Yumiko. "Intimate Networks in the Age of Globalization: Women's Agency and Reassembling Relationships of Care in India." International Union of Anthropological

and Ethnological Sciences (IUAES) Inter-Congress 2015 'Re-imagining Anthropological and Sociological Boundaries.' 15-17 July 2015.

Tokita-Tanabe, Yumiko. "Migration and Settlement in Rurban Areas of Coastal Odisha, India, from 1980s to 2010s." Third Congress of the Asian Association of World Historians (AAWH) 'Migration in Global History: Peoples, Plants, Plagues, and Ports.' May 31, 2015.

〔図書〕(計1件)

常田夕美子、「女性のトラウマ経験と文学インド・パキスタン分離独立時の記憶と創作」田中雅一・松嶋健編『トラウマを生きる(トラウマ研究1)』京都大学学術出版会、2018、437-442。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

常田 夕美子 (TOKITA, Yumiko)
国立民族学博物館・グローバル現象研究部・外来研究員
研究者番号：30452444

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()